慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	内村鑑三における福沢批判と福沢評価：その総合的理解にむけて
Sub Title	Uchimura Kanzo's criticism and appreciation on Fukuzawa Yukichi : toward a synthetic interpretation
Author	柴田, 真希都(Shibata, Makito)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2015
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.32, (2015.) ,p.67- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20150000-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第三十二巻（二〇一五年）
論説

内村鑑三における福沢批判と福沢評価

――その総合的理解にむけて――

柴田　真希都

はじめに

本論は、内村鑑三（一八六一―一九三〇）による福沢諭吉（一八三五―一九〇一）やその周辺（福沢門下生や『時事新報』など）に対する言及を精査し、それらを方向性ごとにいくつかに分類し、一つ一つ検討した上で、内村鑑三の福沢観を、できるだけ総合的な観点から再構築することを目的としている。後述するように、研究史をひも解くと、福沢諭吉と内村鑑三はいくつかの点で対照的な思想家として語られることが多かったといえる。その裏付けの一つとして、内村による福沢批判があったことは確かだろう。そこでの主要論題は二つあったが（経済至上主義と宗教軽視）、本論稿ではそれらも含めて内村の福沢批判を新しい言葉で整理すること、さらにはその批判点に隣接する、福沢への内村による高い評価のいくつかにも陽の目を当てようという史

料上の意図も持つ。

戦後、内村鑑三がにわかに学界で注目され、日本思想史研究の最前列に位置されるようになってから、その時点で既に最前列におり、今なお最前列にいる福沢との比較はもはや珍しくなくなった。[1] 内村から見た福沢評価もいくつか論じられてきた。[2] とはいえ、管見によれば、それはその論者のその都度の主題にそった形で要約されたり、紙幅に合わせてテキストが取捨選択されたりしているため、内村自身にとって結局福沢とはどういう存在であり、その福沢評価から組み立てられる福沢像にはどういった可能性があるのか、といった踏み込んだ形での総合的な評価を提出するまでには至っていないように見受けられる。それゆえ、本論文は主題としてはいくつかの先行研究と大きく異なるところはないが、取り扱う史料の幅広さと、その史料が導く議論の方向性ゆえに、結論としてはそれらとだいぶ異なるものを提出できるであろう、という一つの目論見を持っている。

1　前提としての福沢・内村比較論

戦後の日本思想史研究において、内村鑑三は福沢諭吉の先鋭的な批判者として挙げられることが多かった。同時代人による福沢評を数多く収めて著名な伊藤正雄『明治人の観た福沢諭吉』では、内村による福沢批判の文章の掲載に続いてこう述べられている。

> 内村は福沢の経済主義を憎むとともに、また福沢が自ら無宗教を標榜しながら、世間に宗教を奨励する矛盾をも偽善として弾劾せざるを得なかったのである。当時植村とは対蹠的に、内村ぐらい徹頭徹尾福沢を

攻撃した論客は、ほとんど他に類がないであろう。福沢と内村とは、明治の思想家中、最も異質の存在だったのである。(3)

ここでは内村からの福沢批判点が二点にまとめられている。それに続き、内村と並び称される同時代のキリスト教指導者・植村正久が引き合いに出され、植村の福沢評価と内村のそれとは「対蹠的」であること、そして、そうした内村の福沢評価は「攻撃」とも読めるほど徹底したものであって他に類を見ないほどであり、そこから導けることは、福沢と内村が「明治の思想家中、最も異質の存在」であったということだと整理される。この伊藤の叙述は一九七〇年のものであることから、戦後の内村研究の高まりや、既に発表されていた福沢・内村比較論をふまえてのものであったかもしれない。この伊藤の論評は、現在にまで至る「内村鑑三の福沢論」の範型のように機能しているかの感がある。(4)

一方、そうした対立関係として福沢と内村を捉える視点を持ちながら、福沢と内村はその思索者としての基本的な姿勢において、対照的な思想家とみなされることで、その両者を比較しつつ、後世に生きる我々はその両者を共に研究し、学ぶ必要がある、といった論調が戦後から現在に至るまで散見される。

例えば、日本思想史研究における代表的な学者である家永三郎は、一九五〇年という戦後まもなくの時期に、日本における近代市民精神の探求という優れて戦後的な関心から、同一書物の中で、福沢諭吉と内村鑑三を並べて論じた。そこではなぜ、その主題において福沢だけでは足りないのか、といった視座から内村を導入しようとする姿勢が見られた。

福沢諭吉が近代思想家の筆頭に数へられるのは、彼において近代市民的な立場が最も典型的に最も純粋に発露したからに外ならなかつた。（中略）しかし我々は近代市民精神が単に福沢や福沢と色調を等しうする所謂啓蒙思想家のみによつて日本思想史の上に導入せられたと考へるやうなことがあつたならば、それは少しく早計であらう。近代思想の内容は複雑であり、その複雑な、部分的には一見互に相矛盾するかのごとく見えるいろいろの構成要素より成る近代思想を樹立するためには、異なる立場に立つ思想家のさまざまの角度からの近代化運動を必要としたのである。（中略）さふいふ意味で、私は同じく福沢などと著しく異なる相貌をもつ近代思想家としての内村鑑三を取り上げ、その歴史的意義を明らかにしてみようと思ふ。（中略）しかも内村は単に近代市民精神の鼓吹者であつたのみならず、またその限界の指摘者でもあつた。(5)

この家永の言葉で興味深いのは、「啓蒙思想家」であった福沢と、そうでない「相貌」において現れる内村が共に日本思想史上における「近代市民精神の鼓吹者」であった、という共通性がふまえられていることである。その上で、内村には福沢にはないところの、近代市民精神の「限界の指摘者でもあった」という役割が見出され、両者の相違点も抽出されていることに特色がある。このような「近代思想家」でありながら、「近代市民精神の限界の指摘者でもあった」という二つながらの役割を兼ね備えているところに、内村の、福沢に続く思想史的意義が認められており、ここには両者の世代差への意識も感得できる。

他方、同じく戦後を代表する日本思想史研究者であり、特に福沢諭吉の研究者として名高い丸山眞男は、いくつかの重要な局面で福沢と内村を比較し、両者の強みと弱みを見分けながら、その両者より共に学ぶ必要が

あることを訴えていた。

両種のタイプを明治の思想家から挙げるとすれば、一人は福沢であり、あと一人は内村鑑三だと思いますね。内村はルーテルです。（中略）周囲の情勢がどうあろうと、世界がどう変わろうと、自分は自分の正しいと信ずる思想をつらぬいて行く。この節操と気概がまた日本人には非常に欠けています。（中略）しかし、現実の政治は「可能性の技術」ですから、彼の叫んでいるような原則が具体的にどういう風に実現されればいいかという問題は、内村には欠けている。歴史的な思考法も欠けている。福沢にはプラグマティックな考え方と歴史意識があるけれども、岩をも通すといった内村のような強さと徹底性はない。この二つの要素が結びつけば大したものですが……。(6)

ここでは先の家永の場合と異なり、福沢・内村両人を扱う際の歴史的な道具立ては見られない。丸山の論調は思想家の人物像における思惟傾向の比較であり、視座の採り方が没歴史的であることによってかえって、丸山が発言する「現実の」「情勢」に福沢、内村両思想家の特質が適応されやすくなっていることが注目される。

なお、丸山のこの発言は、自らの福沢・内村比較の視座が、政治学徒である自身の政治思想史的問題意識からのそれであることを表明した上でのものであることに注意したい。(7) 座談という場の雰囲気を反映してか、丸山における福沢と内村が政治思想史における対象としてどのように切り結んでいたのか、という事情がごく率直な形で述べられたといえる。

丸山が言論活動の初期から最晩年に至るまで福沢諭吉の言動を読み解くことにこだわったことはよく知られ

ている。[8] その福沢に対して、自身の最大の関心事である政治思想史の圏内において、内村が対等に立ち上がってきたということ、そのことが丸山思想史学全体にもつ意義は未だ充分に解明されていないようである。[9] もし家永が戦後社会思想史において内村を福沢との対等な比較の俎上に乗せた、ということが言えるとしたら、丸山は政治思想史においてそれに類することを行なったということになるかもしれない。[10]

2　青年内村における福沢―『時事新報』読書経験

これまでの福沢・内村比較論に見出されないことの一つは、若き内村はどれほど福沢やその周辺のテキストに親しんできたのか、という問いである。ここには同年輩の徳富蘇峰などと比べると、その手の史料に欠け、結果としてその問いに十分答えるほどのイメージを構築しづらい、という史料上の制約が挙げられるだろう。[11] しかし史料はゼロではなく、それぞれ示唆的であるので、幾分かの推測を働かせることは可能だろうと考える。

青年内村（明治二〇年くらいまでを想定）における福沢体験を知るのに有用な史料は現在、三点確認される。そのどれもが親しい人物に当てた書簡の中に見出される。最も早いものは「宮部金吾宛書簡　明治一四年一二月一五日付」にある次のような言葉である。

The Sapporo Y. M. C. A. is in very promising condition. About its first meeting, Mr. Ota must have told you sufficiently. Its second meeting was no less interesting. The speakers were as follows: Adachi, On prostitution; Oshima, on Christian Love; Myself, on the use of Alcoholic Liquors (physiological); and 永井碌 on 時事小言.

Many unbelievers are much interested in this work, and already there are 4 applicants for admission, all unbelievers.(12)

この史料は、内村が札幌農学校を卒業後、仲間たちと立ち上げた札幌基督教青年会の二回目の会合にて、その参加者の一人が同年秋に発表された福沢の『時事小言』について報告を行なったことを伝えるものである。『時事小言』第六編にキリスト教普及への批判が見られることがこうした場で報告がなされた一因かもしれない。当時二〇歳の内村がこのテキストを読んだのかは不明だが、ここで『時事小言』の内容を一部でも知ったことが、後年、福沢を論じるさいの一つの知識となっていただろうことは注目されていい事柄である。

続く史料としては、明治一八年の春の日付の次の二つの書簡が挙げられる。

I have nothing very interesting from Japan. Dr. Whitney writes me frequently.（中略）I have 時事新報 and 自由—, and if thou wantest, I may send them to thee.(13)

ホヰットニー氏ヨリ度々書面ヲ送リクレ且ツ常ニ時事新報ヲ送リクレ候(14)

前者は「太田稲造宛書簡　明治一八年三月一日付」、後者は「内村宜之宛書簡、明治一八年四月一日付」である。この時期、内村は渡米しており、ペンシルヴァニア州フィラデルフィアにいた。前者は親友で同じく渡米留学していた新渡戸稲造にあてたものであり、後者は日本の父親にあてたものである。二つの書簡に見られ

る「Dr. Whitney」と「ホキットニー氏」は同一人物と見られ、Willis Norton Whitney（一八五五―一九一八）である。ホイットニーは内村がアメリカに向かう明治一七年（一八八四年）当時、米国公使館の通訳官であり、内村の渡米に際して諸事面倒を見てくれた人物であった。[15] その東京在住のホイットニーが、渡米して間もない内村にたびたび便りをよこし、そこには常に『時事新報』が伴っていたというのである。[16] 当時の船便事情を考えれば、内村の元には、発行からゆうに四箇月くらい遅れた号が届いてもおかしくないが、それでも日刊新聞であるから、送付者側が発行からだいぶ日が経った号を送る、という事情は考えづらい。そこから割り出すと、内村渡米後（一一月六日）の明治一七年の年末から明治一八年の春先までの号が送られ、それを内村が読んでいた可能性が出てくる（残存する滞米時の手紙に『時事新報』の名は他に出てこないから、ホイットニーがどれほどの期間まで内村に『時事新報』を送っていたのかは定かでない）。父親宛の文章で『時事新報』が出てくるということは、もしかして、内村家の読み物としてそれに親しんでいた可能性もある。すなわち、この時期の『時事新報』に掲載された諸説が、記憶となり知識化して、後年提出される内村の福沢像を形作るのに、少なからぬ貢献を果たした可能性は無視できないということになる。

また、それとともに、内村がその『時事新報』を親友に送付することも考えていた、ということを鑑みると、そこに掲載された所論を価値のないものとして等閑視するのでなく、『自由（新聞）』と合わせて、それなりに読む価値のあるものとして認めていただろうことが知られてくる。[17] 後年、明治三〇年代の内村は『万朝報』や『東京独立雑誌』で活発な評論活動を展開するが、そこでは『時事新報』掲載記事を傍らに自らの記事を書いていた場面も認められる。[18] それとともに『時事新報』掲載記事について論評することと、福沢それ自身について論評することとは限りなく近く扱われていた、ということをも伺われるのは、こういう青年時代の福沢―

『時事新報』体験に多く与っていることが推測される。

なお、その他にも青年内村の福沢歴を推測させるものとして、内村の単行本処女作の『基督信徒の慰』（明治二六年）における記述がある。内村はこのテキストで思想や事業の歴史的生命について強調する文脈で「楠正成の湊川に於ける戦死は決して権助の縊死にあらざりしなり」と述べ、それに続けて「（福沢先生明治初年頃の批評）」とやや控えめに付け加えている。[19] これは言うまでもなく、内村が『学問のすゝめ』第七編「国民の職分を論ず」における福沢の用例が引き起こした社会的論議（いわゆる楠公権助論）[20] を知っていたことを表明している。しかしながら、ここで明治七年に刊行された第七編のそれを「明治初年頃」とする年月の指示は不明瞭であり、文脈上の用法も福沢の真意を確かめたことが伺われないような伝聞そのまま、といった受け取り方を感じさせる。そのことからは、論争当時一三歳であった内村が『学問のすゝめ』を自ら読んだと認定するのは難しいばかりか、むしろ周囲の福沢への熱のこもった論評を聞き流す程度の、その手の議論にあまり関心の高くない少年であった可能性の方が高く見積もられるくらいであろう。

3　内村による福沢批判の要点

内村における福沢論といえば、従来、批判的なものを中心に論じられてきた。次章で整理するような、内村による福沢に対する積極的な評価を一部かいつまんで取り上げることも時になされてきたが、[21] その史料をもって福沢に対する内村の基本的な姿勢が批判（あるいは非難）にあったことに異議を挟むような総括は導かれていなかったようである。

それら論調には十分な道理があり、本稿は必ずしもその諸考察を無意味とするような意図をもたない。むしろこれまで提出された「内村の福沢批判」をより徹底したものとして提出することに貢献するかもしれない。本章では、次章にて内村の福沢に対する積極的な評価を考察することを待ちつつ、やはりそれでも十分に目立ってあるところの福沢批判のいくつかを改めて整理し、その諸論説のもつ意味範囲を再検討してみたいと考える。

（1） 拝金宗・経済至上主義という批判

冒頭で触れたように、また伊藤正雄について論及したさいに、内村の主要福沢批判点として、経済主義と宗教軽視が取り上げられることは既に確認した。しかし論者によるこの二点の取り扱い方は異なるようである。管見の限り、後述する宗教軽視、すなわち福沢が宗教を中下層民の道徳心を養うための方便として有用視するような、いわゆる宗教の道具主義的な活用観への内村の批判に関しては、あまり異議を挟む余地がないのか、それ自体の妥当性を問う声は聞こえない。一方、福沢を目して拝金宗の棟梁のように扱う内村の次のような論調には、福沢のテキストを読み込んだ研究者の間から疑義が提出されてきた。(22)

> 彼も亦九州人なり、而して天下彼の功労に眩惑せられて未だ彼の我邦に流布せし害毒を認めず、金銭是れ実権なりといふは彼の福音なり、彼に依て拝金宗は恥かしからざる宗教となれり、彼に依て徳義は利益の方便としてのみ貴重なるに至れり、武士根性は善となく悪となく悉く愚弄排斥せられたり、彼は財産を作れり、彼の弟子も財産を作れり、彼は財神に祭壇を築けり、而して財神は彼を恵めり
>
> 遠慮なく利慾を嗜みし者は薩人と長人となり、利慾を学理的に伝播せし者は福沢翁なり、日本人は福沢

翁の学理的批准を得て良心の譴責なしに利慾に沈淪するに至れり、薩長政府の害毒は一革命を以て洗滌し去るを得ん、福沢翁の流布せし害毒に至ては精神的大革命を施すに非ずんば日本人の心底より排除し能ざらむ。(23)

この文章は『万朝報』連載記事の最期の部分にあたる。このような内村の「福沢拝金宗」批判をめぐっては、川崎勝の論説が簡にして要を得た分析を行なっている。(24) すなわち「拝金宗」という言葉の出自は、福沢批判者の側にではなく、『時事新報』に関わった高橋義雄の『拝金宗　一名商売のスヽメ』（一八八六年）に見出されること、その著書の目的は福沢が『民間経済録』で説いた「尚商立国論」に準じるところの「金銭の巧力」を旧武士層に知らせ、「蓄財富国の基を立つることを勧め」「到富の要訣」を著すことにあったという。(25)

一方で川崎は、当の福沢にはむしろ金銭至上主義を批判する思想があったと付け加える。また、そのことを支持する『福翁百話』の九二「銭の外に名誉あり」に内村も注目していること、そこで彼が戸惑いつつもそれなりの評価を提供していることをも紹介している。(26)

とはいえその後、内村は同じ『福翁百話』に触れ、次のような見解を披露してもいる。

『富を得るに憂慮多し、之を保つに恐怖あり、之を用ふるに誘惑あり、之を濫用して罪悪あり、之を失ふて悲痛あり、而して終に其用法に就て責任を問はれざるべからず』と、是れマッシユー、ヘンリーてふ赤髯学者の教へし所、我の福沢先生の教義と比すれば天地月鼈の差あり、今や我国拝金宗の福音書とも称すべき『福翁百話』梓を重ぬる已に七版に及びしと伝へらる、拝金国は西洋に非ずして返て東洋の我が日

本帝国にあるなき乎。[27]

内村は一年近く前にそれなりに評価したテキストを含む『福翁百話』を、総体としては「拝金宗の福音書」といい、拝金宗を「福沢先生の教義」と断じている。内村にとっては福沢個人の思想というより、その表明が掲載されているところの『時事新報』全体が福沢思想の表明というように受け取られていたため、「銭の外に名誉あり」のような主張をそれなりに評価しつつも、歴史的な人物としての福沢のこれまでの言説の中に位置づけた場合、それはむしろ「福沢先生の教義」全体の中では例外として受け取られたのだろう。[28]

以上のような事情や、先に引用した内村自らの言葉を再度吟味した上で、この「福沢拝金宗」批判の要点を検討してみると、次の二つが重要な論点として抽出されてくる。

①福沢の金銭観や実業観は、藩閥政府を頂点とする明治日本社会の国是である富国強兵策と親和的であり、前者が後者の政策を学問的に正当化しつつ、その大衆化の役割をも担っているといった政治社会史的分析。

②福沢のような経済至上主義は、欧米の一流の思想家からは批判されるべき「東洋」流の現在主義[29]である、といった、西洋思想家の正統とされる基準に照らし合わせた上での、東西比較知識人論的な批判。

ここには、内村の福沢批判の背景として、明治藩閥政府批判だけでなく、それを支える明治の産業社会一般のエートスや、それを醸成するのに力ある経済・教育・言論各分野の指導的立場の人々への彼の強い批判的立場が想定されよう。それは明治三〇年代に見られた彼の労働組合への支持や、足尾鉱毒事件への強い批判などに見られる、「平民主義」[30]あるいはキリスト教的ヒューマニズムからの批判的立場であったと分析される。

内村にとって福沢は経済・教育・言論各分野にわたり、長く国民的影響力のあった人物と認められていた。

内村のまなざしは福沢の議論にいくつかの例外を認め、その都度高く評価するのを惜しまなかったとしても、「福沢氏の如きは道徳は畢竟経済なりと道破し」[31]と把握されたような、徳よりも富国強兵を支える経済事情を優先して語ってきた福沢の経歴は今更打ち消せない、ということになるようだ。また、たとえ「銭の外に名誉あり」のような議論が従来からの福沢の本心であったとし、かの金銭に重きを置く経済優位な言説が「怠惰な武士を力と勤勉とに向かわせるひとつの手段」として説かれていたとしても、後述するように、それはそれでその「政策」[32]的立論の姿勢こそが問題となるのである。

ところでこの拝金主義（財神崇拝、mammonism）への批判は、明治天皇制において体現された「帝王崇拝」批判と並んで、内村の生涯にわたる近代日本批判の重要論点であった。近代日本における偶像崇拝現象というのも、『聖書』内で描かれた世界と違わず、およそこの二つに極まるものと内村は見ていた。そのような彼の思想的立場からすれば[33]、福沢のような在野の資産家や権力者を、彼らが金銭の価値を徳による制限から分離して語る限りにおいて、厳しく批判せざるを得なかった、という事情が考えられるのである。

（2）宗教の道具主義的活用観に関わる批判

内村において目立つもう一つの福沢批判、宗教の取り扱いに関しては、既出の論考が触れているので、ここでは「宗教の大敵」という福沢没後に『万朝報』（明治三五年一一月一日）に載ったテキストの分析を行うことで、内村による福沢の宗教論への批判が含むところの意味を明らかにしていきたい。このテキストの主要な箇所は次の通りである。

宗教を侮辱する者にして之に勝る者はない、彼等は宗教は迷信であると言ふて居る、彼等は宗教は有識の徒には全く無用のものであると唱へて居る、然るに彼等は此迷信此無用物を彼等の同胞に推薦しつゝあるのである、彼等の不信実も此に至て其極に達せりと云ふべきではない乎。

然も斯る人は此日本国には決して少くはない、故福沢諭吉先生の如きは終生斯る説を唱へられた、爾して彼の門下生は今に猶何の憚る所なく此説を唱て居る、然るに最も奇態なる事には斯る無礼千万の説に対して大義憤を発した仏教又は基督教徒のあるを聞かない、聞かないのみならず、彼等が斯かる説を以て広量であるとか、大度であるとか評して返て之を歓迎して居るのを聞く　実に奇怪千万ではないか、（中略）

然し此国に於ては斯かる不信実極まる思念を懐く人は福沢先生と其門下生に限らない　日本の政治家と称ふ人達は大概は此種の人である、彼等は人に依て道を説くとか唱へて人に依ては如何なる不道理でも之を説いて少しも耻と思はない、曾て故グラツドストン翁が或る田舎の老嫗を捉へて彼女に愛蘭自治制を彼が国会に為したと同じ筆法を以て説いたとの話があるが、然し爾んな事は日本の政治家達には迚も出来ない、彼等は唯虞翁の馬鹿正直を嗤ふのみであらう、然しながら此誠実があつたからこそグラツドストンに彼の大勢力があつたのである、（中略）

政治家の政略は少しは許せる、然しながら学者の政略に至ては少しも許すことが出来ない[34]

ここで内村が既に物故した「福沢諭吉先生」と今なお『時事新報』などによって社会的影響力を保つ「彼の門下生」を目して批判している事柄の内実は次のように整理される。

①福沢一派は、自身が信じてもいないことを人に勧めておりそれは不信実である。

③こうした物事の考え方は日本の政治家の中に顕著である（グラッドストンの例と対比）。

③そのような主張は政略的であり、政治家ならともかく学者のモラルとしては許容し難い。そういう姿勢では真理の説得的な伝播は不可能となる。

このように整理すると、内村のこの宗教をめぐる福沢批判が、特定の宗教を信仰するか否かの問題を超えた、真理の伝達者としての知識人の姿勢そのものに関する根本的な批判として提出されたものであったことが読み取られてくる。

なお、内村は西洋文明の諸事項の積極的な移入者、宣伝者、実践者であった福沢の社会的役割やその影響力を見据え、その合理的な世界像から「他界的なもの」が排除されている、との世界観批判を展開したこともあった。[35] しかしそれは数多く繰り返されたことではない。よって、先の類の福沢批判は、自らがキリスト者であることや、特定の宗教を信じる立場であるかどうかには当座関わらない見地からの批判であったことに注目されねばならない。この批判は、福沢による宗教の道具的活用観に伴って現れてきたところの、「自ら信じないものを人に勧める」という、知識人としてあるまじきと思われた姿勢――真理の取り扱い一般に対する姿勢――へと極限されていったのである。その批判の矛先は端的にこのテキストの末尾を飾る「政略」という言葉に現れている。この「政略」という言葉こそは内村自身の批判的知識人[36]としての根本的姿勢に関わる重要概念であり、かつ内村の福沢批判の最要点に位置するものと認められるので、次に一節を割いて検討してみる。

（3） 政治的・政略的思惟傾向や行動選択への批判

前節までにおいて、従来内村による福沢批判の代表的なものとして扱われてきた拝金宗批判、宗教軽視批判

とを取り上げてみた。ところでその二つの話題における内村の筆鋒の激しさゆえか、または量的な多さやまとまりのゆえか、意外にも福沢批判の最要にあたる批判は見落とされてきたように思われる。それは内村から見て、福沢が随所で、それにふさわしくない場面において政略的であるように見える、という事柄であった。

例えば内村は「HEIGHT OF MAMMONISM.」（『万朝報』明治三〇年五月二五日）で、福沢の実際的、現実主義的傾向がよく表れたエピソードを取り上げつつ、そこに現れた福沢の教訓とも処世術ともみなせるような、人を社会経済的な状態で分けて接することへの批判を展開している。[37] また、それと紙面を一にして発表された「WAY OF PROMOTION.」においては、表玄関より公然と歩み入るのでなく、横から裏からという策を弄して人に接することが出世の近道であるといった福沢の議論を整理し、そこに現れた福沢の姿勢を「術策、政策、隠密、保護的擬態」だとして非難している。[38]

福沢没後にもこの系統の批判は見られた。「予の宗教的生涯の一斑」は、先に検討した「宗教の大敵」と元になった講演が同じものであるが、ここでは先のテキストで「政略」と呼ばれていた事柄が表現上、よりわかりやすく記されている。

> 私はグラツドストンがエライと思ふたのは、彼が愛蘭土の自治策を立つて論じた時に、彼の家の近所の無一文字のお婆さんに、希臘の哲学等を引いて是だから愛蘭土に自治制を施さなければならないと言つて一生懸命に説いて居つたと言ふことであります、福沢先生から言へば、それには人を弁へなければならぬ、人によつて話をしなければならぬと言はれるであらうが、私はグラツドストンが議論するに方て、お婆さんに対しても、反対党の首領に対しても、同じ確信を有つて居つたといふのを聞て非常に彼を尊敬致しま

す[39]

本稿では内村による福沢への理解の仕方を問題としているので、彼が引き合いに出す個々の事柄の真実性は問題としない。福沢も明治初期には「山出しの女中」に言い聞かせても通じるよう自らの文章を平易に書くという姿勢があったというから[40]、ここで挙げられた福沢の姿勢――人を見て法を説け――への批判は常に妥当ではないかもしれない。ただ内村には、福沢が人の社会経済的な状態から判断して、その人に対する自らの姿勢を変化させる人物であると見えていたようであり、その認識はこの文章が発表された福沢没後にまで抱かれていたことがわかる。

この系統の批判を要約すれば、福沢は影響力ある言論人であり、真理を誠実に取り扱うべき学者・教育家と目されているにも関わらず、世間の人びとや門下生に対して一様に接し、その都度変わらぬ世界観や倫理観を開陳するのではなく、まるで政治家のように要所で策をめぐらす「政略」的な姿勢が目立ち、それはその置かれた社会的地位にふさわしくない知識人の在り方である、ということになるだろう。

福沢に政治性や政略的な傾向を認める立場は、より応用的な批判を形づくるのにも貢献した。例えば、内村は「NOTE AND COMMENT.」(『万朝報』明治三一年一月八日[41])において、福沢の西洋人に対する懐疑的な見解――利欲追求者としてみる見解――を取り上げ、それを西洋人に対する偏った見方、外見だけで判断し心中深くを伺わない見方であると退けて、そのような見方に、民を導き誤る「シナ流政治家」(Chinese statesman)と同様の思惟傾向を認めて批判している。「シナ流政治家」とは、内村が時の帝国主義的政治家一般に認めていた、根本的に排外的な姿勢を指しているのであろう[42]。

このように、内村の福沢批判が、金銭や宗教をめぐる個々の論点だけでなく、そうした問題圏に顔をのぞかせるような、福沢という社会的人物の基本的な言論構築姿勢や思惟傾向そのものにまで至っていたことは重要である。

ところで、これに類する批判は徳富蘇峰にもあって、例えば蘇峰は「政府の人に向て、一時の権道に内々黄白を用ゆるも可なりと広言し、之を新聞に書し、之を小冊子に掲るに至ては、実に吾人は福沢氏が責任ある記者として、太だ自ら愛惜せざるを悲しまざるを得ず」といい、福沢が「民間の人望を収むべきの手段」、すなわち人心籠絡の術として金銭に訴えることを勧めているのを非難している。(43)

内村の特色はそうした福沢の姿勢を思惟傾向の次元で捉えて「政略」的、政治家的と名指ししたことである。「政略」なる概念は、内村が日清戦争後に多方面へ批判的なジャーナリストとして立ち上がってきた際、特に日本人の国民性を形容する概念として提示されたものであった。(44) そうした彼の批判的立場からしてみれば、福沢の言論構築の姿勢、そこに透けて見える福沢の思惟傾向そのものが、彼の置かれた影響力ある地位、西洋文明の推進者としての教育家・新聞記者としての役割にふさわしいものではない、と認められたがゆえに、それに一部重なる職責意識をもつ内村は徹底した批判を展開したのであろう。それが内村の福沢批判の行き着く所であったということは、今後、内村と同時代人の福沢批判を彼のそれと比較検討するような作業の際には、注目されてしかるべき事柄である。

4　内村による福沢への好評価の諸相

前章では内村による福沢批判の要点とその行き着く先がどこにあるのかを確かめた。本章ではそうした徹底した批判にもかかわらず、一方で、内村が福沢に対していくつも高い評価を提出していることを確認したい。この視点は、従来、対比的に配置される傾向にあった福沢・内村比較論では論点にならず、内村による福沢論の紹介の文脈でも十分に展開されていないことであるので、これまであまり陽の目を見なかったその種の史料の紹介も兼ねつつ、できるだけ発表順に配慮して丁寧に整理していきたいと考える。

（1）藩閥政府と儒教的教育への鋭い批判者としての評価

内村による福沢への高い評価は、『時事新報』で「藩閥政府」が連載開始（明治三一年八月四日）以後目立つようになる。内村は明治三〇年から『万朝報』に和英合わせて多くの時事評論や文明批評を載せて行ったが、そこでは福沢への批判を量的に上回って、藩閥政府への批判が主眼となっていた。それゆえ、たとえ発信者が従来の批判対象である福沢―『時事新報』であったとはいえ、敵の敵は味方、内村にとってその内容が我が意を得たり、と感じたのであろう、一転して高い福沢評価がいくつか登場してくる。

その最初のものは英文で発表された次のようなものである。

Mr. Fukuzawa's story of the decline and fall of the Satsuma-Choshu-Dynasty as given in the recent issues of his Jiji Shimpo is an exceedingly interesting reading. It shows of what hollow stuff the dynasty was made up.（45）

この文章は「藩閥政府」連載開始の約二十日後に公表されたものである。内村はその連載を「Mr. Fukuzawa's

story」（福沢氏によって語られる物語）として認め、「an exceedingly interesting reading」（きわめて面白い読み物）と記事への評価としては最大級の賛辞を送っている。むろん、従来いくつかの点で鋭く批判した福沢とその門下生によって提出された記事であるので、その方面から望ましい記事が出ることに少なからぬ戸惑いもあったかもしれない。「旧幕人に依りて編せられんと望みし薩長政府罪悪史は、反て時事新報記者の筆に依りて世に供せらる、世間の事は凡て斯の如きものなり。」[46]と一歩退いた姿勢から感慨深げな感想ももらしている。

その後も、この連載記事への賛美は福沢それ自身への高評価と合わせて提出された。

> Mr. Fukuzawa is greatly to be thanked for his bold and outspoken delineations of the sins and crimes committed by the men of the Satsuma-Choshu dynasty. His articles on this absorbingly interesting subject have been appearing in form of series in his Jiji Shimpō now for over a month. Recently, speaking about the motive that led these men of intrigue to the adoption of the new regime of education now in force, the sage finds it in the necessity they were driven into to defend themselves against the popular discontent then assuming an ominous aspect.（中略）
> Looked with the eyes of a keen observer, the vaunted Loyalty and Patriotism of our new regime of education can be traced to a mean motive of this sort.[47]

この記事で内村は、藩閥政府の悪事を描く福沢の大胆であけすけな筆（bold and outspoken delineations）に謝辞を呈しつつ、再度、記事の内容をして夢中になるほど面白い（absorbingly interesting）と絶賛する。またその記事が開始一カ月以上を経て、最近では藩閥の策謀家たちが、いかにして現今の教育体制を採用するに至っ

たのか、その背景事情や卑しい動機を明らかにしていると紹介するなど、[48]ある意味『時事新報』の宣伝のような役割を積極的に買って出ている。この文章で書き手とされる福沢は「賢者」（the sage）と名指しされるだけでなく、「鋭い観察眼の持ち主」（a keen observer）とも評されており、その記事と福沢の見識への信頼が手放しで表明されているように受け取られる。

内村において、この「藩閥政府」を介して、福沢への紐帯を強く感じたとしたら、それは当時、政府「ご自慢の忠誠心と愛国心」（the vaunted Loyalty and Patriotism）を生み出すと内村に把握された「新しい国家教育体制」「our new regime of education」への批判を福沢と一にしている、と認められたことが大きかったようだ。それは政府主導で展開された「支那道徳」教育に対する評価に極まっている。先の英文が載った自らの雑誌の「見聞録」で内村は次のように「藩閥政府」の本文を引用してまでその紹介に努めている。

福沢先生の『藩閥政府』愈出で、愈々妙、その彼等が支那道徳を国民に強ゆるに至りし道筋を述ぶるや、彼等の肺腑に入りて痛快限りなし。先生曰く

更らに一歩を進めては、英米仏等の政治書講習を以て子弟を外道に導くものなりと宣言し、文部大臣を更迭して理化専門の外には仁義道徳忠信孝悌の孔孟主義を担ぎ出し、下は小学より大中学校まで、全く之を周孔時代の支那人化せしめんと企てたり

又曰く王命の下に立ち民に臨めば天下何者か之に反抗するを得んとは、曾て伊藤が西京にありて本願寺の坊主に説諭したる言に依りて証明せらる可し、即ち其言に曰く、政治家は君に依り坊主は阿弥陀に頼みさへすれば、国民を治め檀徒を度する事は更らに難き事なし。本願寺の如きも財政困難若しく

は大改革など、屡門徒の問題となれども、阿弥陀さへ信じて之に一向帰依の色を示せば、檀徒の財宝は皆寺院に集まるべし云々と

是ぞ即ち先生の慧眼に映ずる藩閥大臣の国家教育なるものの淵源にして、一国の子弟を挙げて悉く支那人たらしめんと欲せし藩閥政府の注文になりし教育制度なりと知らば、其有り難た味も大分減ずるなるべし。(49)

ここで内村が「支那道徳」という言葉で指すのは、特定の道徳体系（ここでは「仁義道徳忠信孝悌の孔孟主義」）を政策的に、教育という手段で国民に強いて、国の隅々に至るまで政府に望ましい人間を造型しようとする帝国的野心のことである。この批判点にて、自らと「先生の慧眼」が一致していることが内村には喜ばしかったのだろう。この筆は次にみるように、具体的な藩閥出身者と福沢自身の思想的立場との比較にまで及んで行った。

(2) リベラルな思想家として

内村は時事連載中の「藩閥政府」を「愈々妙」としたためか、同じ「見聞録」にて、今度は山県有朋と福沢の比較に及んだ。

元帥山県侯の機関新聞にして極端の帝政主義を唱ふる『京華日報』は僅に三百の読者を有すと云ひ、殆ど米国流の自由平等主義を唱ふる福沢先生の『時事新報』は日本第一の新聞として世に迎へらる、是れ亦時

勢の一兆候なるべし[50]

「極端の帝政主義を唱ふる」山県を内村が嫌うのは当然といえるが、ここで注目すべきはそれに対比された福沢―『時事新報』への評価を表す言葉である。『時事新報』を「日本第一の新聞」とする世評を肯定的に扱うだけでなく、福沢自身を目して「米国流の自由平等主義」の提唱者としていることは注目に値する。なぜなら、明治三〇年代の内村自身が「米国流の自由平等主義」の最たる提唱者として現れていた、と認められるからである。

例えば、この時期、内村は米国の市民を英国のそれより高く評価したり、日本も「共和主義の精神」を養うべきだ、といった文章を発表したりしていた[51]。また、先の「見聞録」発表からまもない同年一一月に発表された「国民思想の改革」では次のように述べていた。

日本今日の要する改革は、政治又は文学又は社交等一部の改革にあらざるなり。日本今日の要する改革は、思想の改革なり、即ち父母に対する思想の改革、夫に対する、妻に対する、兄に対する、弟に対する、僕と婢とに対する、友と隣人とに対する、一言にして蔽へば『人』に対する思想の改革なり。権利義務の念、此に依りて生じ、新法律の精神此に依りて明らけく、新憲法の運行此に依りて稍々円滑なるを得べし。そは東洋的父子兄弟朋友の関係は、今日欧米諸国に於て行はるゝ人間相互間の関係と大に趣を異にするものあればなり。[52]

この文章の主題は、先に内村が英文で発表していた「共和主義の精神」（Spirit of Republicanism）を発達させるという試みに大いに関連している。やがては政治文化や社会制度に及ぶところを、まず家庭内の人間関係の自由化から開始しようとする企ては、『女大学評論』や『新女大学』を著わした晩年の福沢の関心事に通じるといってよい。内村自身そのことに気づいていたのか、福沢没後の聖書講義にて「是故に人は其父母を離れ其妻に合て二人の者一躰と成るべし然ば二には非ず一体なり」という「創世記」の言葉の理解の補足に、福沢の新婚夫婦別居論を持ち出し同意を表しているのはこの点、興味深い。(53)

（3）　在野において無位無冠を通した「偉大なる平民」として

『時事新報』が「藩閥政府」を連載するようになってから、内村の福沢への高い評価が表明されるようになったことを確認したが、さらにその年の九月末に福沢が脳溢血で倒れたことが明らかになって以後、福沢の業績や知識人としての特徴を積極的に評価する言説が目立つようになる。特に福沢が倒れた情報を耳にしてから最初に発行されたであろう『東京独立雑誌』一〇号（明治三一年一〇月一五日発行）では共に英文であるが、二種類の福沢への積極的な評価が提供されている。一つは福沢が病気に倒れたことを知らせつつ、彼のそれまでの功績をたたえるような文章といえる。

> Japan has found a Great Commoner at last. Mr. Fukuzawa now lying seriously ill commands the sympathy of the whole nation. He is great not by decorations he wears or ranks he holds, -he is entitled to none of these, -but by himself and good works he has done. Never in the history of the Meiji Era has a private citizen bulked so large

before the nation's eyes. A man in all his simplicity is greater than a Marquis in all his decorations. Oh that we had more men like Mr. Fukuzawa, and less Marquises, Counts, Viscounts, Barons and other "man-made" nobles.(54)

ここで内村は福沢の病状を心配する雰囲気が国民的なものであることを捉え、福沢をそのような存在にした偉大さを、冠位をもたないこと、「Great Commoner」（偉大なる平民）であることに認め、賛美している。また、そのような福沢が政府の連中と異なって、在野にて独力で良質な仕事を成し遂げてきたことは、明治の歴史において前例のなかったことであるとも語る。こうした福沢評価は明治二〇、三〇年代において珍しいことではなかったといえるが(55)、内村の場合、特に伊藤博文はじめ「decorations」（装飾）に満ちた維新の元勲との対比で、福沢に「simplicity」（平明さ、質素さ）なる評価を与えていることが注目される。これはアメリカ流の「Commoner」（平民）に最大の価値を置く内村の人間評価からすれば、この上ない賛辞であったといえよう。内村が一方で福沢に対して強い批判を抱きながら、こうした点においては彼に最大限の評価を与える感性、社会的人物としての福沢のある側面に強く共鳴する性質を持ち合わせていたことは、十分強調されてよい。

（4）多くの「公共善」を為した、アメリカニズムの側にいる代表者として

『東京独立雑誌』一〇号に掲載された、もう一つの福沢への言及は、先に検討した、彼が在野にて独力で為した良質な仕事（by himself and good works he has done）と響きあうところの、内村自らの知識人としての立場を表明するような文章において現れた。

With all the odium attached to Americanism in this country on account of its evident republican tendency, there can be no doubt whatever that those of our countrymen who imbibed the American spirit, did, in general, more public good than those who took in the German or Austrian modes of thinking and acting. We need but mention the three great names of Messrs. Neesima, Mori and Fukuzawa, in contrast with other names which need not be mentioned, as illustrations of this our proposition.(56)

内村が福沢を「米国流の自由平等主義」の提唱者であると評していたことは先に確認した。ここではより広い文脈を作り、福沢を、明治日本においてドイツやオーストリア流の思想・行動様式を選択した人々に比べ、一般的により多くの公共善（public good）を為したとされるアメリカニズム（the American spirit）の代表的採用者として、新島襄、森有礼と共に挙げている。

この文章で注目したいのは「With all the odium attached to Americanism in this country on account of its evident republican tendency」（その明白な共和主義的傾向のため、この国でアメリカニズムに寄せられるすべての憎悪にもかかわらず）という言葉である。内村自身、当時の日本では危険視された(57)アメリカ流の共和主義精神の採用を願っていたこと、また他方、福沢に対してアメリカニズムの吸収（imbibe）を感じていたということを考え合わせると、この指摘はなかなか意義深いものとして読まれるだろう。すなわち、内村の福沢の業績への評価は、自らの思想的立場から見て高く見積もられるものであり、それは共和主義者と見られることを拒んだ福沢において(58)、アメリカ流の共和主義精神を見いだそうとする段階にまで至っていた可能性を示唆するものである、ということである。福沢においては、内村の見知った時代（後期福沢）において、さまざまな局面でイギ

リス流をよしとする傾向が強く発揮されたように思われるが、そうした福沢の読者として、内村が彼に自らの立場と近しく、また望ましいところのアメリカニズムの傾向を認めていたことは、今後、両者を比較検討する際の、一つの重要関心事になるだろうと考える。

（5）教育を通じての国民的功績

「藩閥政府」の連載や福沢の病臥によって、内村が福沢に抱く積極的な評価がいくつか披露されたが、その一連の評価の時期の最後を飾るのが、福沢の国民的教育家としての仕事についてであった。この点は既に示唆されたこともあるので[59]、簡潔に整理してみたい。

内村は福沢の教育家的側面については二つの角度から言及している。一つはそれが国民の外国語習得に功があったことに関してである。

> 外国語の研究は愛国心を減殺すと、噫、奇異なる反駁かな、（中略）福沢諭吉氏が彼の英語に精通するに依て日本国に尽せし功蹟は如何に偉大なりしぞ。国を愛せざる者こそ自国の文字をのみ以て満足すべけれ。[60]

ここで内村は福沢の、幕末維新期における英学者・西洋事情紹介者としての側面を想定していたかもしれない。あるいは慶應義塾における英語教育の重視を誰かから聞き知ったのだろうか。いずれせよ、この英語に熟達した教育者としての福沢観は、先に展開されたアメリカニズムの採用者としての福沢評価に通じている。自身、英語学習と英語表現に精通した記者であり、それらの重要性を説いた文学論を『外国語之研究』（一八九

九）にまとめた内村であるから、自らがその作業に寄せる国民的使命感に照らし合わせつつ、福沢のその方面の業績を讃えたことは、いかにも内村にふさわしい仕事であったと評されよう。

教育者としての福沢に寄せるもう一つの視線が明らかになるのは次のようなテキストにおいてである。

神と俗とに併せ事へんとする事程怕しい事はない、俗のみに眼を注ぎし福沢先生の教育事業は稍成功であるのに、基督教諸先生の事業の斯くも失敗に終らんとするのは全く彼等が二人の主に事へんとした為であつたに違ない[61]

これは、同志社などキリスト教系学校が学生集めなど経営上の苦境に陥っている中、むしろ徹底して世俗的実業の観点に立った福沢の教育方法の方が比較的成功した、と判断する文章である。内村は、政教分離と経済的独立を重視する観点から、ミッション系学校には手厳しい傾向があったが、ここでは、現今のキリスト教的教育が、その本務を忘れて神と富（世俗の支配者）との「二人の主」に使えようとしていることへの批判の文脈で、福沢の純然たる世俗的教育――神ではない方の主にのみ使えている教育――の方がよりまともな結果を生んでいるではないか、とミッション系学校への皮肉と叱咤が入り混じった言説が呈されている。これは福沢教育への具体的な評価を表明するものではないが、先に見た外国語教育への高い評価を合わせて考えると、少なくとも福沢の教育的成果を低く見積もった文章だとは読まれない。「稍成功」という表現に含みを残してはいるが、福沢への高い評価を提供してきた時期の末尾に位置する文章と見れば、その含みの内容をもって福沢教育への批判的な文章を構築しなかった、という事実の方こそ見るべきところだと考える。

5　総括

前章で時系列的に整理したような、内村自身による福沢への積極的な評価を記すテキストは明治三二年をもって見られなくなる。史料としては確かめられないものの、その後明治三五年まで福沢への批判的な見解も同様に見られないから、こうした福沢評価は福沢が没する明治三四年頃までは続いたかもしれない。この福沢評価期（明治三一年九月以後、明治三四年以前）には、厳しい福沢批判が見られないことは内村の節操を表すのか、単純にその時期、福沢への批判性が薄まっていたのか、どちらなのかは判定しづらい。はっきりしていることは、福沢が没した前後には福沢に対する言及は見られず、その一年後（明治三五年）あたりから、また福沢に対する批判が時々展開された――既にみたようにそれは「宗教の大敵」のような、徹底して厳しいものも含んでいた――ということである。

本稿の結論として、これまで見てきたところから、内村鑑三における福沢評を時系列的に解読することに配慮するとすれば、それは以下のように総括されると考える。

①内村の福沢評は、当初は世間一般に流布していた「拝金宗」――内村の把握としては普遍的道徳よりも経済事情を優先させる現実主義の一環にある――への批判に加え、自らが実践していない宗教を熱心に勧めることや、西洋（人）との交際法を語る際に垣間見える政略的思考や政策志向性を捉えて、それらを事の真相を逸している、あるいは真理への裏切りである、として批判する論調を展開していた。

②『時事新報』それ自体は、記者活動と並行して目を通すようになっていた中で、特に同紙上で「藩閥政府」

が連載され始めたことを機に、その内容に我が意を得たりと思ったこと、さらに、その後まもなく福沢が病床に倒れたことなどが重なり、以前には見られなかった、福沢の業績全般をふり返るような高い評価が見られるようになった。

③福沢没後は、史料的に見て、概ね①に通じる批判的論調が目立つようになった。

④以上を総括してみると、次のようになる。内村は基本的には、福沢が明治の新日本で果たした英米思想の移入者、教育者としての貢献をそれとして高く評価し、無位無冠の公人であった彼を「偉大なる平民」、「優れた観察者」などと称賛することにやぶさかでなかった。しかしその基本的な評価の高さと福沢が取り組んだ仕事の偉大さゆえに、福沢以後の世代として、福沢よりも一層米国流の生活意識や思惟方法を血肉化していたであろう内村は、いくつかそこでの経験や学び取った原理原則から、福沢周辺の言動で不適当と思われたもの、あるいは彼の立論の根本的な欠如や誤謬と思われた諸点を、個々人の健全な育成、あるいは国民国家の将来性への配慮からして看過することができなかったのだろう。

このような総括を批判的に検討するにあたっては、従来、福沢・内村比較論では十分展開されなかったような諸論点――世代差の問題や実際の政治をめぐる動き、あるいは西洋経験の質や深度の違いなど――について熟考する必要があろう。本稿では当初の目的の場所に一応たどりついたことをもって、その課題を以後の研究の進展に委ねることにしたい。

注

（1）近年のものは以下の通り。ミラ・ゾンターク「内村鑑三と福沢諭吉―その文明論をめぐって」『内村鑑三流域』（真

菜書房、二〇〇〇年）二〇―四三頁、梅津順一『「文明日本」と「市民的主体」―福沢諭吉・徳富蘇峰・内村鑑三』聖学院大学出版会、二〇〇一年、山折哲雄「福沢諭吉と内村鑑三」『Ｖｏｉｃｅ』三一七（ＰＨＰ研究所、二〇〇四年五月）二七―二九頁、川崎勝「福沢諭吉と内村鑑三―日清戦争の評価をめぐって」『福沢諭吉年鑑』三二、（福沢諭吉協会、二〇〇五年）九七―一一五頁。

（2）早くは、太田雄三『内村鑑三』（研究社、一九七七年）二一一―二一三頁。最新のものとしては、川崎勝「内村鑑三の福沢論」（『福沢手帖』一五四、福沢諭吉協会、二〇一二年九月、一二―一七頁）。

（3）伊藤正雄『明治人の観た福沢諭吉』（慶應義塾大学出版会、二〇〇九年）一四七頁。本書は『資料集成　明治人の観た福沢諭吉』（慶應通信、一九七〇年）の復刊書である。

（4）現時点で、最新の論稿と思われる前掲、川崎勝「内村鑑三の福沢論」も、前提としてこの伊藤の論評を取り上げて論旨を導き出し、結論部でもこの伊藤の論調を踏襲して植村と内村の比較を行い、内村の福沢批判の「直截」性を導いている。

（5）家永三郎『近代精神とその限界』角川新書、一九五〇年、五五―五六頁。

（6）「福沢から何を学ぶか」『福沢研究』八、福沢先生研究会、一九五七年。『丸山眞男座談』二、岩波書店、一九九八年、三一六頁。なお、丸山が内村には「歴史的な思考が欠けている」としたことと、その後、松沢弘陽が一連の論考「内村鑑三の歴史意識」を発表したこととは、研究史上無縁とはみなされない。松沢「内村鑑三の歴史意識」一―三『北大法学論集』一七（四）、一八（一）、一九（四）、北海道大学法学部、一九六七―六九年。

（7）同右、「福沢から何を学ぶか」を参照。

（8）丸山が晩年まで福沢の思想や言動をどう理解するかに大きな関心を抱いていたことは、一九九〇年代の以下の日本学士院論文報告が物語る。「福沢諭吉の「脱亜論」とその周辺」（一九九〇年九月十二日）『丸山眞男話文集』続四（みすず書房、二〇一五年）、「福沢における文明と独立――言葉の用法についての一つの視点」（一九九二年九月十四

日）『丸山眞男話文集』続一（みすず書房、二〇一四年）。

（9）松沢弘陽「解説」丸山眞男『福沢諭吉の哲学』（岩波文庫、二〇〇一年）を参照。丸山における福沢と内村、というこの二対象へのこだわりの意味は、丸山が後年、福沢研究者としては充実した論考を数多く残しながら、内村に関しては、ほとんど何も言わなくなったことによって、かえって不明瞭になってしまった感がある。このことの意味は丸山研究として重要と思われるが、別稿に譲るべき問題である。

（10）丸山における、自身の政治思想史的関心の圏内で福沢と内村を取り扱っている論考としては、丸山「解説」『現代日本文学全集』五一巻（筑摩書房、一九五八年、四〇九―四一七頁。後に「福沢・岡倉・内村―西欧化と知識人―」として『忠誠と反逆』筑摩書房、一九九二年、に収録）を参照。この論考の初出時期が、本文に引いた文章が発表された時期と近接していることも見逃せない事実であろう。

（11）蘇峰に関する青年時代の福沢体験の詳細は、本井康博「徳富蘇峰と福沢諭吉」（『同志社談叢』一八、同志社大学、一九九八年）一二四―一三一頁を参照。

（12）『内村鑑三全集』三四巻、一七―一八頁。以後、内村鑑三の一次資料の引用は『内村鑑三全集』一―四〇巻（岩波書店、一九八〇―八四年）により、『全集』、巻数、該当頁数を表記する。必要に応じて初出情報を付加する。ルビや圏点は基本的に省略する。引用文は適宜（中略）という表記によって一部省略することがある。また引用文中には現在の基準からみて差別的と思われる表現も見出されようが、歴史的な文献としての扱いからそのままにしておく。

（13）『全集』三六巻、一三九頁。

（14）『全集』三六巻、一四八頁。

（15）同右参照。ホイットニーの来日の由来やその前後の歩みに関しては、鈴木俊郎『内村鑑三伝』（岩波書店、一九八六年）四四五―四四六頁も参照。

（16）ウィリス・ホイットニーの母は熱心なキリスト者であり、その娘でウィリスの妹であったクララ（『クララの日記』

で有名）とアデレイドは内村の最初の結婚式（一八八二年）に出席するような仲であったというから、当時、勝海舟の邸内に住居を構えていたホイットニー家と内村の付き合いを推測すると興味深いものがある。

（17）同年三月に終刊する『自由新聞』を内村が読んでいたことは一考に値する。内村は自由民権運動との直接の関わりはなかったと見られるが、キリスト者が少なからず参加していた自由党には、後年、好意を持っていたかのような言説がある。「「自由党総理」板垣伯」（『東京独立雑誌』一五号、明治三一年。『全集』六巻、二四五頁）。また、それゆえに、自由党が藩閥と結託した時の失望も大きかった。「時勢の観察」（『国民之友』三〇九号、明治二九年八月一五日、『全集』三巻、一三三―一三四頁）を参照。

（18）例えば、「下界の観察」『東京独立雑誌』一五号（明治三一年十二月五日）では次のような記事が見られる。「時事新報の伝ふる所に依れば、馬車鉄道の賃金引き上げに同意を与へたるものは、時の府知事肥塚竜なりとす。近頃公娼設置の県令を群馬県に発したるものは、時の県知事草刈親明なり。此の如きは累年国家の為めに苦節を守りたりとか称する党派出身知事の手腕なる乎。」（『全集』六巻、二四九頁）。

（19）『基督信徒の慰』明治二六年二月。『全集』二巻、四九頁。

（20）楠公権助論が福沢の執筆活動に及ぼした影響については、平山洋「『学問のすすめ』と『文明論之概略』」『近代日本研究』二五号（二〇〇八年、慶應義塾福沢研究センター）一〇五―一一三頁を参照。

（21）前掲、太田二一一―二一三頁、前掲、川崎「内村鑑三の福沢論」一七頁など。

（22）例えば前掲、川崎「内村鑑三の福沢論」一五頁。萩原延寿は、「内村をとくに勉強した者ではな」い、と自ら断りながら、内村のこの種の福沢批判を取り上げ、端的に「内村の偏狭さ」「誤解」と判断している。『瘠我慢の精神』（朝日文庫、二〇〇八年）一九―二一頁。

（23）「胆汁数滴」『万朝報』明治三〇年四月二七日。『全集』四巻、一三四頁。

（24）前掲、川崎「内村鑑三の福沢論」一三―一六頁。

（25）同右、一五頁。

（26）同右、一五―一六頁。該当の内村の記事は「MAMMONISM AND ANTI-MAMMONISM.」『万朝報』明治三〇年五月一二日。『全集』四巻、一五六―一五七頁。

（27）「赤髯録」『万朝報』明治三一年三月一日。『全集』五巻、二九二頁。

（28）内村と同年輩で福沢の「金力」への加担を同じく鋭く非難した人物は三宅雪嶺だろう。福沢が権力には痩我慢を張るべきとしながら、「金力に対して之を張るべきを思は」なかったと皮肉り、（『同時代史』第二巻、岩波書店、一九五〇年、一八八頁）、「権力に対して頗る強硬、金力に対して然らず、或は楽商と呼ばる」（同上第三巻、一九五二年、二四六頁）と評するなど、アジア・太平洋戦争後、晩年においても福沢に対して手厳しい。

（29）福沢を目して「処世接物の現在主義」と表現したのは山路愛山である。『基督教評論・日本人民史』（岩波文庫、一九六六年）五七頁。

（30）内村の平民主義、特に徳富蘇峰との関わりにおけるそれについては梅津順一「日清戦後における徳富蘇峰と内村鑑三」（『青山學院女子短期大學紀要』四六、一九九二年、九一―一〇八頁）が参考になる。

（31）「予が見たる二宮尊徳翁」『静岡民友新聞』明治三七年六月二五日、『全集』一二巻、二三六頁。

（32）前掲「MAMMONISM AND ANTI-MAMMONISM.」より。原文は「simply a means, a ‘policy’ to emulate the indolent samurai to power and industry」。『全集』四巻、一五六頁。

（33）明治三〇年代の内村を代表する思想的立場である共和主義については、拙論「明治期・内村鑑三における共和主義の展開」（『公共研究』一〇、千葉大学公共学会、二〇一四年、一三〇―一七九頁）を参照。

（34）「宗教の大敵」『万朝報』明治三五年一一月一日。『全集』一〇巻、三三八―三三九頁。

（35）「THOUGHTS AND REFLECTIONS.」（『万朝報』明治三〇年一〇月二四日）『全集』五巻、一一〇頁。このテキストで内村は、福沢を加藤弘之と並んで、不可視なもの、あるいは他界的なものを合理的な世界像（信念体系）から退

ける「哲学」の代表的人物として取り上げている。なお、こうした哲学や宇宙論の次元で福沢を加藤弘之と一括りにする見方は、既に徳富蘇峰において見られた。徳富蘇峰「福沢翁」『早稲田文学』一〇二号、明治二八年一二月。前掲、伊藤編『明治人の観た福沢諭吉』三〇頁。

(36) 筆者はこの言葉を、J・バンダからE・W・サイードにまで至る、西洋の規範的知識人論の中心にある概念として自覚的に用いている。詳しくは柴田真希都『明治知識人としての内村鑑三―その批判精神と普遍主義の展開』(東京大学総合文化研究科博士論文、二〇一四年)序論、第五章における議論を参照。

(37) 『全集』四巻、一七六―一七七頁。

(38) 同右、一七七頁。こうした指摘は例えば、「宇宙生」の名で『時事新報』(明治一八年八月一日―六日に掲載された「立身論」における議論を指すだろう。『福沢諭吉全集』一〇巻(岩波書店、一九六〇年)三五七―三七二頁を参照。

(39) 初出は『高輪学報』第十三号。『聖書之研究』二九号、明治三五年一二月一〇日。『全集』一〇巻、四二六―四二七頁。

(40) 「福沢全集緒言」『福沢諭吉著作集』一二巻(慶應義塾大学出版会、二〇〇三年)四一一―四一五頁。

(41) 『全集』五巻、一二七頁。

(42) これに関連して、福沢は基本的に人間一般を「利己的動物と独断」しているのだ、といった人間観評価も合わせて考えると興味深い。徳富蘇峰「福沢翁」『早稲田文学』一〇二号、明治二八年一二月。前掲、伊藤編『明治人の観た福沢諭吉』二九―三〇頁。

(43) 「福沢諭吉氏の政治論」『国民之友』一六五号(明治二五年九月)、前掲、伊藤編『明治人の観た福沢諭吉』二六頁を参照。

(44) 内村において、「政略」なる言葉は、当初「仁愛の道は最善の政略なり」(「日清戦争の目的如何」『国民之友』明治二七年一〇月三日、『全集』三巻、一四七頁)といった限定において肯定的にも使用されていたが、日清戦争後はそ

うした用法すら反省されたのか、その後、この言葉を積極的な価値をもって使用することはなくなったと見られる。「政略的民族」（『東京独立雑誌』三五号、明治三二年六月二五日、『全集』七巻、一四四頁）や「腐敗録」（『東京独立雑誌』四八号。明治三二年一一月二日、『全集』七巻、四五五―四五六頁）を参照。

（45）「SEA-SIDE MUSINGS.」『東京独立雑誌』六号、明治三一年八月二五日。『全集』六巻、九九頁。

（46）「勃々」『東京独立雑誌』七号、明治三一年九月一〇日。『全集』六巻、一一四頁。

（47）「THOUGHTS AND REFLECTIONS.」『東京独立雑誌』八号、明治三一年九月二五日。『全集』六巻、一二四―一二五頁。

（48）引用文中出てくる「新しい教育体制の採用」の話は「藩閥政府（十四）政府の籠城策と松方の出世」（『時事新報』明治三一年九月八日）における内容を指す。

（49）「見聞録」『東京独立雑誌』八号、明治三一年九月二五日。『全集』六巻、一二六―一二七頁。

（50）『全集』六巻、一二七頁。

（51）「THE SPIRIT OF REPUBLICANISM.」『万朝報』明治三〇年二月一九日。『全集』四巻、一二―一三頁。詳しくは前掲、拙論「明治期・内村鑑三における共和主義の展開」における議論を参照されたい。

（52）「国民思想の改革」『東京独立雑誌』一二号、明治三一年一一月五日。『全集』六巻、一九七頁。

（53）戸塚生「毎日曜聖書講義」『無教会』一五号、明治三五年五月五日。これは内村の自宅聖書講義の他者による筆記であるが、掲載雑誌『無教会』は内村が主筆の雑誌であるから、全編彼の眼が届いているものと見てよく、彼の言葉として受け取るのに遜色のないテキストと認められる。

（54）『全集』六巻、一五二頁。

（55）福沢の美点を語るにあたりその「平民」性を取り上げることは珍しくなかった。例えば北村透谷は福沢を「平民に対する預言者」と呼んでいるし（「明治文学管見」『評論』明治二六年、前掲、伊藤編『明治人の観た福沢諭吉』五六―

五七頁）、山路愛山は福沢をして「明治の時代に平民的模範を与へたる者」と言い、その文筆を「平民的文学」と名状している。「明治文学史」『国民新聞』明治二六年三月一日―五月七日（伊藤編『明治人の観た福沢諭吉』四〇―四一頁）。徳富蘇峰が福沢を指して「日本の大市民」といったのも（「福沢翁」『早稲田文学』一〇二号、明治二八年。伊藤編『明治人の観た福沢諭吉』三〇頁）、内村による great commoner という表現に通じるものだといってよい。

（56）『全集』六巻、一五二頁。

（57）この時期、共和主義について語ることは、政権を崩壊に導いた尾崎行雄の共和演説事件を想定しないではありえない。内村もそれをめぐって露呈した日本の政治文化を強く批判している。「内と外と」（『東京独立雑誌』七号、明治三一年九月一〇日。『全集』六巻、一〇七頁。）や「THE JAPANESE NOTES. Tokyo. Oct. 29. 1898.」（『東京独立雑誌』一二号、明治三一年一一月五日。『全集』六巻、二〇四頁）を参照。

（58）福沢が自らを共和主義者と見られることを拒否したとしても、それは反天皇制論者ではないという弁明であって、市民的エートスとしての共和主義の推進者であったかどうかは別に一考に値しよう。この点、家永三郎「福沢諭吉と共和主義」『福沢諭吉全集』一三巻付録（慶應義塾編、一九六〇年）を参照。

（59）前掲、川崎「内村鑑三の福沢論」、一七頁。

（60）「外国語研究の利益」『東京独立雑誌』十九号、明治三二年一月一五日。『全集』六巻、三三二頁。

（61）「奇人奇語」『東京独立雑誌』四五号、明治三二年一〇月五日。『全集』七巻、四三四頁。